

日本一の書評

August 6



今週のイチオシ

ブックレビュー1

『蠕動で涉れ、汚泥の川を』

著者 西村賢太
集英社 / 1600円

にしむら・けんた / 07年『暗渠の宿』で野間文芸新人賞、11年『苦役列車』で芥川賞受賞。著書に『東京者がたり』他

あこがれのレストランでアルバイトを始めた貫多の「悪行」とは……
匂い立つ名手の筆致

評者 阿部公彦
東京大学准教授

読みどころと呼ぶにはあまりに破廉恥というか下品な場面なのだが、この作品中、作家の筆が、息を呑むほどの壮麗崇高な迫力を見せつける随一の場面がある。小説もあと数十頁を残すあたり、アルバイト先のレストラン店長に懇願して店に住み込ませてもらった主人公が、そんな恩も忘れて夜な夜な人のいない店内でやり放題、悪行に手を染める。といってもやるのは実にせこいことばかりだ。酒の盗み飲み。おかずの盗み食い。募金箱の小銭の着服。そして、

やむにやまれぬ性欲に駆られ、あろうことか同じバイト仲間の女子大生が店に保管するキュロットを密かな性の道具に使うとするのである。キュロットのたたまれ方など正確に記憶して証拠が残らないように注意し、慎重にことをすすめた男だが、そこには予想もせぬ事態が待ち受けていた……。何でここまで描けてしまうの？ というほどの書きっぷり。200頁目をお楽しみに！
さすが短編の名手西村賢太だけある。最新作『蠕動で涉れ、汚泥の川を』

はれつきとした長編なのに、あちこちに小さなスリルや、信じられないくらい匂い立つような生活感、意表を突く「笑いどころ」が満載、文章のリズム感も抜群で、思わず頁面に顔をすりつけるようにして読んでしまう。脇役も秀逸だ。やさしくも執念深い店長、その奥さんは癩癩持ちの女、ひどい二重人格のキュロット女子大生——みんな人間の匂いがぶんぶんとしている。ストーリーはいつもにも増してシンプルなのに、極上の冒険譚が堪能できる。

主人公のおなじみ北町貫多は、私小説作家・西村賢太その人と重なる。本作で描かれるのは中学卒業後の十代のアルバイト遍歴で、父親の起こした猥褻事件のために一家は崩壊、中卒の貫多は日雇い労働に身を投ずる。しかし、彼はひそかに飲食店のアルバイトにあこがれていた。何といういじましい夢だろう。西村の作品といえ、たとえば天国と地獄を行き来する「秋恵もの」のジェットコースター的な展開や、大正期の私小説作家の供養を素材にした「藤澤清造もの」などが知られるが、この作品では頻繁に貫多が見せる「人並みの幸福を手にした」という願いにけっこう涙腺をくすぐられる。飲食店でさわやかに働きたい、彼女をつくってデートし、二回に一回くらいはセックスをしたい……。何となくかわいらしい願いだろう。しかし、それが決してかなわないことをも我々は知っているのだ。

あべ・まさひこ / 英文学者。13年『文学を〈凝視する〉』でサントリイ芸賞受賞。『幼さという戦略』他